

雪舟焼由来

生きたねずみと見違えられた涙のねずみを描いて有名な画僧雪舟は、明（中国）に渡り、水墨画の道奥を極めて帰朝し、石州益田の医光寺に住職し、国家的名画を造している。

其の後歴代の住職の中には雪舟の流風を汲み、香り高い芸術の雰囲気をかもし、民衆の関心を高からしめた者が多かった。

そうした石州の伝統にあつて、深く雪舟に傾倒してその精神を何とかして陶芸の上に再現したいと長年研究せられたのが、福郷柳仙氏である。

氏は禅を学び、たまたま唐の善化禅師の鈴韻を尺八に写した明暗虚無僧の故事を聞き、大いに悟るところあつて、雪舟の芸道の心をそのまま釉薬に潜ませようと苦心惨憺、遂に独特の錆雲・小波釉雲の法等数種の特技を考案せられるに至った。

名声漸く期界に高くなつた昭和二十年、土と泥の行脚の末、石州今市加賀羅山麓に最適最上の土を得て、ここに古法そのままの松薪を燃料とする登り窯を築いたのである。

爾来その輩出する名器は、民芸界、茶道界、数奇者等多方面から愛好せられ、いつの間にか雪舟焼と呼ばれるようになったのである。